

明治初期における小学教則編成問題について：熊本県を中心として

著者	堀 浩太郎, 藤川 裕典
雑誌名	熊本大学教育学部紀要 人文科学
巻	43
ページ	215-226
発行年	1994-09-30
その他の言語のタイトル	A Study on the Organized Curricula at the Elementary School in Early Meiji Era : A Case in Kumamoto Prefecture
URL	http://hdl.handle.net/2298/1015

明治初期における小学教則編成問題について

— 熊本県を中心として —

堀 浩太郎・藤川 裕典*

A Study on the Organized Curricula at the Elementary School In Early Meiji Era

— A Case in Kumamoto Prefecture —

Koutaro HORI and Yusuke FUJIKAWA*

(Received May 23, 1994)

はじめに

1872 (明治 5) 年発布された「学制」像は，学制序文に示された教育理念にもかかわらず国家の「富強安康」をめざすものであった。それゆえに，国民皆学の基礎学校たる小学校は「下等・上等」8 年制をとり，その教育内容も文部省（のちには師範学校）制定の小学教則を準拠とする各府県版小学教則に基づいて行われることとなった。もとより，幕末以来様々な教育機関が普及展開していたとはいえ，国民の子弟全てが同一の教育内容を同一の機関で学習する，しかも自費で行うということは，そのような社会的・経済的基盤が未確立の当時にあつてはとても困難なことであつた。それにもかかわらず，文部省は区戸長・学区取締などの地方名望家層を動員して師範学校の設立・教員の養成・小学校の設立・就学の奨励・教則の改変を行い，近代的な国民学校制度を打ちたてようとしたのである。

ところが，一部の人々を除く大部分の民衆はこれら新政府の近代的な諸施策（徴兵令・地租改正令など）によってもたらされる生活上の激変を好ましいものとはうけとらず，全国各地でいわゆる一揆が起こった際，学校も一揆の攻撃目標の一つに組み込まれたのである。そこで文部省は学制の不備を探るべく，九鬼隆一・西村茂樹等を全国各地に派遣しその報告書を『文部省第三年報』¹⁾および『文部省第四年報』²⁾に掲載した。そこでは，とくに教育内容の画一制やそれが大多数の人々の生活からいかに遊離したものであるかが述べられていた。このような状況下では「学制」の改正は必至といえる。この時期，文部卿不在のなかで実質的な教育行政を進めていたのは田中不二麿文部大輔であり，1879 (明治 12) 年の教育令を準備した中心人物であつた。この教育令の原案となつた日本教育令案が太政官に提出された 1878 年 5 月 14 日の 9 日後 5 月 23 日に小学教則・小学教則概表・小学用書目録などを含む「学制」施行上の細則 23 件を一括廃止した。これにより，翌年 9 月 29 日「教育令」が公布されるまで，教育課程に関する全国的基準はいっさい存在しないことになつた³⁾。さらに，いわゆる「自由教育令」においても第 22 条において「公立学校ノ教則ハ文部卿ノ認可ヲ經ヘシ」とあるだけで誰が教則の編成権を持つかは明記されておらず，前年度の 1 月より再度刊行を開始した『文部省日誌』を通してその点が明確にされた。それは，

* 熊本県下益城郡豊野村立豊野小学校

1880年1月の長崎県令および同年4月の岩手県令に対する指令により、教育令下に設置された学務委員が持つものとされたのである。これにより、名実ともに教則は地域住民に選出された学務委員が教員や町村会とともに編成することとなったのである⁴⁾。

本稿は、上記のような全国的動向のなかで、熊本県下ではこの小学教則編成がどのように行われたかを論じることを課題とする。これまでの熊本県における明治10年代の教育史研究は、花立三郎の大江義塾を中心とする一連の業績⁵⁾はあるものの、もっとも地域住民と関わりのある小学校における教則についての研究は、全国的レベルでの熊本県の位置付けを示した片桐芳雄の研究⁶⁾のみと言ってよかろう。しかし、これとてもマクロ的研究といえる。小学教則自由化を巡る地域の「教育会議」の動向や新聞の論調、村会における審議の様子など、よりミクロな実態をあきらかにしつつ自由民権運動期の教育の一端を明らかにすることを課題とする。

I 熊本県の教則自由化政策と教則の変遷

先述の片桐芳雄の研究によれば、1880年頃の各府県の教則政策は地域民衆に教則編成の主体を委譲するという前提のもとに、1) あらかじめ府県当局が一定の基準を示したところと、2) それをも示さずはじめから学務委員を中心とする地域民衆に編成を任せたとところの二つに大きく分けられる。熊本県は全国各府県の63%余⁷⁾を占める1)に属し、その教則改正に際しては県レベルの教育会議（臨時教育会議）を開催して審議している。

それまでの小学教則は、下等小学4年・上等小学4年の計8年に分かれており、東京の師範学校の教則に準拠している⁸⁾といえる。これに対し、臨時教育会議を経て作成された教則は、下等小学3年・上等小学3年・高等小学2年の3階梯制とし、かつ高等小学は「上下等小学科卒業ノ上猶修学スルモノ、為メ別ニ之ヲ設クルモノトス」⁹⁾と規定している。すなわち、従来小学を修了するのに基本的には8カ年を要していたものが、6カ年で一応の区切りを付け、さらに進学を希望する資力あるものの課程として高等小学を設置したのである。

教育会議は、通常25名の議員により審議される規定¹⁰⁾であるが、1978(明治11)年7月の臨時教育会議では1日から3日間にわたって32名の議員によって審議作成されたものである。会議の趣旨は、権令富岡敬明の以下に示す演説書によってうかがうことができる¹¹⁾。

政治の善良は国民精神を養ふにあり。其の精神を養ふは教育を盛んにするにあり。教育を盛大にするは学資の如何にあり。学資の如何は人民の信否にあり。然り而して人民の信否は教師其人を得ると教則其の度に適するとに關す。故に砲煙僅に消して小学師範校を起し、将来師範となるべきものを養成す。蓋し卒業派遣の期も近きにあるべし。今や文部省に於て小学教則を廃し地方の改選に任するもの偏に是れ人民の度に適せんことを欲すればなり。爰に於て更に委員を命じて其の草案を起さしめ、之を教育界定期に先ち臨時会を起し学務官をもつて議長とし区長学区取締教員等を召集し議員となし、諮詢する所なり。各員の如きは区内人民の信依を受ると、小学生との教授を掌る所の責任なれば宜しく時勢人情に適するを主とし審議を尽されよ、其の学資の如きは亦他の会議に譲らん

これによれば、会議開催の発端は「今や文部省に於て小学教則を廃し地方の改選に任するもの偏に是れ人民の度に適せんことを欲すればなり」とあるように、文部省の教育政策の変更に因る

ものといえる。しかし、そこには「人民の度」を十分考慮しようとする姿勢がうかがえるのである。そこに、地方三新法体制下における人民の時代の到来と、明治政府の一定の譲歩が読み取れるのである。

II 小学教則編成自由化を巡る動き

(i) 地域における「教育会議」の動き

1876(明治9)年7月20日から5日間にわたって本県師範学校で県「教育会」¹²⁾が開かれた。県内初の教育会議である。これは、これに先だって出された「教育会略規」に基づいて開かれたもので、これまでの学区取締会議から教育に関する部分を独立させた形である。したがって、県の諮問会議的な性格のものであった。名称も「教育会議」であったり「教育会」であったりしている。また、常設の教育会議は1878年6月の「教育会議規則」¹³⁾制定まで待たねばならなかった。

1878年8月「熊本県学則」の制定の際に諮問したのが県の教育会議であったが、同年6月13日布達の「教育会議規則」によると、教育会議の構成員は議長に県学務官、学区取締＝区長兼務(7名)、各中学区専務(7名)、訓導(7名)、学務官(2名)、師範学校役員訓導(2名)からなり、教則等を議事し、会場は当分師範学校¹⁴⁾を使用するとある。翌年9月これがさらに一部改正になり、議長が師範学校長に、構成員に熊本中学校から数名加えられた¹⁵⁾。

一方、地域において小学教則編成等を話し合う機関として1989年に「郡区教育会議」が設けられる。これは同年9月30日布達「郡区教育会議規則」によって設けられたのである。規則の主な内容は以下の通りである。

(1) 会議は通常会議と臨時会議の2種類で、それぞれ甲乙の2部に分かれる。

(2) 甲部は春(町村会前に開く)、乙部は秋。

(3) 構成員は、甲部：戸長、学務委員、

乙部：学務委員、公立小学校教員よりなる。

(4) 構成員は30名～40名を目安とし、選挙によって選出する。

(5) 乙部で協議する案件は

○校舎建築法改良について

・公立小学校教則校則編成及び改正について

○郡区内の教員及生徒褒賞について

・公立小学生徒試験実施方法の匡済について

・公立小学授業法改良について

・公立小学教科書選択について

・教育上の利害得失を査諦し之の匡済を謀る件について

・学事景況報告の方法について

・学事進度を比較する方法について

・公立小学生徒教養の目的を定める件について

・私立学校の公益有無を判別する件について

甲部は省略(ただし、○印は甲乙部の共通議案)

(6) 議決した件については郡区長を経て、県庁へ報告すること。

なお、経費についての件は町村連合会の決議を経ること。

しかし、「熊本新聞」によると実際には県教育会議ではない「教育会」が1880年7月から各地で開催されている。下記の表1は1880年7月から80年末までの各地の掲載記事をまとめたものである。

これをみると、県が「郡区教育会規則」を制定する以前に熊本区、菊池郡、山鹿郡（現鹿本郡）、山本郡（現鹿本郡）阿蘇郡で「郡区教育会議」が既に関わっていたことがわかる。文部省及び県当局の教則編成自由化政策のもとで、教育の編成権が自分たちに移ったととらえ、自主的に自分たちの実情にあった教則を編成しようとしたことが伺える。

表1 地域教育会開催状況

新聞掲載日 (実際の開催日)	会議名及び 主催地域	開催 場所	議 事 内 容 【 】内は掲載された参加者
7月12日 (7月10日)	「教育会」 熊本区	阿弥陀寺	私立大学の件 【有志】
7月19日 (7月17日)	「教育会」 熊本区	立田口 久本寺	教育の方法 【区内公立小学校教員・学務委員】
7月30日 (7月23日 ～24日)	「小学教育会」 菊池郡	菊池 隈府小学校	菊池郡教育会概則25条について 【同郡32小学校の学務委員及び教員、計59名の参加】
8月2日 (不明)	「教育会」 阿蘇郡	宮地町 (現阿蘇町)	教則編成の件 原案Ⅰ：模範教則を以って郡中一般に公布する 原案Ⅱ：県教則を変更して簡易教則を設け各地便宜に教授する 【旧一小区より教員1名学務委員1名ずつ、計40余名】
8月3日 (8月1日)	「教育会」 熊本区	阿弥陀寺	不明 【有志20余名】
8月4日 (不明)	「有志教育会」 熊本区	不明	熊本有志「教育会」の主旨及び会則について【有志】 なお、8月5日付の雑報欄に、「熊本有志教育会の節中学校幹事木村弦雄氏の祝文」との記事あり。
9月1日 (8月26日～)	「合併教育会」 山鹿郡・ 山本郡	山鹿公立小 学校	小学校教則編成について
9月2日 (9月4日)	第2回 「菊池教育会」 菊池郡	隈府	不明
10月9日 (9月27日～)	「連合教育会」 球磨郡	人吉中学	議決内容として ・教育会議々事細則 ・教育会議の種類（連合会議・連校会議） ・甲乙会議議員選挙区 ・尋常小学科の件 ・簡易小学科の件 ・教員褒賞規則（学務委員小会議）
11月24日 (12月10日～)	「菊池郡教育会」 菊池郡	隈府	不明
12月1日 (11月20日)	「八代区教育会」	慈恩寺	会則について

注：1) 「熊本新聞」の1880年7月から1880年12月までの記事内容をもとに筆者が作成したものである。

2) 「会議名」は新聞の掲載記事にしたがった。

3) 実際の開催期日は予定のものも含め、新聞記事にしたがった。

(ii) 新聞にみる小学教則自由化論

県内でこのような動きがみられるころ、この小学教則編成自由化をめぐるのは新聞の社説・投書にも掲載されている。また、このころ行なわれていた演説会でも教育についての演題が盛り込まれている。

1878(明治11)年5月に「小学教則」を含め教育課程に対する全国的な基準がいっさい存在しなくなったが、その1か月後の6月に小学教則廃止を受けて次の資料1のような投書がみられる。

資料1

先ニ文部ノ小学教則ヲ廃シ各地方ノ制定ニ任セサル亦此意ニ符スルモノ乎何則地ニ東西アリ俗ニ異同アリ(中略)今賢明庁ニ満ツ計ルニ各府県ノ学則ヲ定ムル唯学科ノ名目(理学地学史算学等)ヲ立而シテ其書冊ヲ定メサル尚猶割烹ノ法大盤ニ魚膾ヲ盛り小盤ニ烹物ヲ用ヘシト其大規ヲ立ルカ如ナルヘシ若夫レ毎科書冊ヲ定ムルモ各教員ヲシテ必モ固ク之ヲ守ラシメサル猶一旦大盤ニ鯉ヲ盛り小盤ニ鯛ヲ用イント定ムルモ割烹者此地鯉ニ乏シ故ニ暫ク鮒ニ換ヘン又鯛ニ適セス故ニ之ヲ刀魚ニ換ヘント請ヘハ主人乃チ之ヲ許スカ如ナルヘシ……坪井 野中良樹¹⁶⁾

これは、学則を定めたが、「唯学科ノ名目」のみを示して「毎科書冊」を定めないのは、「割烹ノ法」で「大盤ニ魚膾ヲ盛り小盤ニ烹物ヲ用ヘシ」とその「大規」を定めるようなものであり、また、もし「毎科書冊ヲ定」めても「各教員」に対して「必モ固ク之ヲ守ラシメ」ないのは、割烹で「一旦」、「大盤」には「鯉ヲ盛り」、「小盤」には「鯛ヲ用」いるようにと定めても、「割烹者」が「此地」は「鯉ニ乏シ故ニ暫ク鮒ニ換ヘ」よう、また「鯛ニ適セス故ニ之ヲ刀魚ニ換ヘ」ようと「請ヘハ」、「主人」がこれを許すようなものである、という内容である。画一的な教則を批判し、「大規」のみ定め、あとの教育内容は地域の実情と教員の選択に任せるような教則に期待をする内容の投書である。

しかし、いわゆる「自由教育令」のもと学校の設置、就学がある程度地域、民衆の選択にまかせられることになり、地方の行政担当者が公立学校へ就学させることの困難を感じていた頃¹⁷⁾になると、このような楽観的な「自由教育」論とは異なり、強圧的な「干渉」を否定しながらも、自由の確立のためには「奨励」や「誘導」が必要だ¹⁸⁾と説く下記のような社説があらわれる。

「教育ハ自由ナリ羈束ス可カラス若シ之ヲ羈束スルトキハ自由ノ氣象ヲ消燼シテ自治ノ精神ヲ確然ナラシムル能ハズ」である。しかし、「其時ト勢トヲ察シテ之レガ適度ヲ量ラ」なければならぬ。というのも、「奈何セン我県下ノ如キ人文未開ノ地ニ至リテハ却テ針路ヲ失シ五里霧中モ嘗ナラサルノ形状アルヲ免レズ為メニ学事衰頽教育萎靡ノ色ヲ現ハスニ至」っているからである。このままでは「人民自由ノ恩波ニ俗ス」ことはできない。ここにおいて「吾輩人民ハ宜シク奮発興起自由教育ヲ進取」しなければならないのであるが、この「奮発興起セシメ進取ノ氣象ヲ発セシムル者」は「各地有志者及ヒ学校教員」つまり、「学務委員タリ学校教師」である。「学務委員タリ学校教員タリ者」は「地方教育会議」を起こして「共ニ教育ノ真理ヲ討論シ其精ノ精ナルモノヲ得」て「生徒」に「提撕誘掖」すれば生徒も「真ニ教育ノ自由ヲ得」て、「奮起シ」て教育が「忽ニ」することはできないと悟るであろう¹⁹⁾。

これは教育は自由でなければならないが、現にそのような「自由」のもと結局学校は「衰退」してしまうという事態²⁰⁾を前にして、「地方教育会議」を設立して学務委員や教員が中心になって事態打開の方策をさぐるべきだと提言するものである。

また、同年8月14日社説も地方適宜の教育法(教則)が多少「不当」でも「学制」の「画一教

則」の「害ニ比セハ其功用ノ大ナル万々ナリ」として「教育家ノ急務」はこの「地方適宜ノ教育法」施行へ努力すべきだと述べている²¹⁾。これらは、文部省による教育の自由化政策の転換がだれの目にも明らかになってきたことを受けてのことであろう²²⁾。

また、1878年8月22日の社説には「男子ハ自ラ男子ノ性質ヲ備ヘ女子ハ自ラ女子ノ性質ヲ備フルモノナレバ其施ス処ノ教育モ亦自ラ之ヲ異ニセサルヲ得ス」²³⁾として男女別の教則の必要性を訴え、県教育会議の議事²⁴⁾に不満をもらしているものもある。

一方、1880年9月13日の投書²⁵⁾は「目下各小学校ニ於テ教則ヲ編成スルヤ教育令ニ依遵セサルヨリ多クハ文部ノ却下スル所トナリ数日ノ労ヲ將テ一綴ノ反故紙ヲ造為シ」と述べ、実際に各小学校において自主的な教則の編成にあったことを伺わせる内容になっている。そこで、次節で、具体的な内容を示す資料は乏しいが、地域において編成された教則をみてることにする。

III 地域における小学教則編成の実際

(i) 「岩野・四丁・芋生」における教則改正

県北の山鹿郡岩野・四丁・芋生の三か村（現鹿本郡鹿北町²⁶⁾）は1880（明治13）年に下記の資料2のような「小学教則之儀ニ付伺」²⁷⁾を出している。これには、年月日が記載されていないが文中に「昨12年太政官第四拾号ヲ以学制ヲ被廃」とあることより、1880年のことだとわかる。さらに変則的な教則を自主編成したために「伺」を県に立てていることから、前述の同年2月24日付で熊本県令富岡敬明代理熊本県大書記官松本鼎より出された甲第24号布達の「別に教則を編成するも該模範教則に依るも取調の上来る3月31日限可伺出此旨管内へ布達候事」²⁸⁾に該当する伺であろうと思われる。したがって、80年2月末から3月31日までの間に作成された文書だと推測できる。また、原案の作成者は「三小学校学務委員」江上玄良ではなかろうか。江上は1875年5月まで芋生村で医者をしていたが、75年5月より76年まで第6大区10小区（現鹿央町）の戸長を、76年から79年8月までは同14小区（現鹿北町）の戸長²⁹⁾を、その後1年間は学務委員を務めている。また、住んでいた芋生村で開業する一方自宅で私塾及び医塾を経営していたということからも、この地区の言わば「名望家」であつと思われる。そのほか、この「小学教則之儀ニ付伺」の原案が江上の自宅にあったことなどから、彼の作成したものと筆者は推測した。

この伺は次のような内容である。

改革には「一得アレハ一失」があるのは当然であるが、「其任ニ当ルモノ」がその予防策を事前に立てなければ、その「一失」がおこるのは「言ヲ俟スシテ明カ」である。本三か村でも「予メ簡易経当ノ法」を設けなければ、学校は世に言う「寺子屋流トナリ儒学者流トナ」るであろう。実際、聞くところによると、各地で私学校が設立され、手習い師匠なみであったり、「漢籍一片」を教える所であったりするという。このままでは「学校ノ規則モ終ニ地ニ落テ水泡ト」なりかねない。そこで我々は有志と「塾議ヲ遂ケ」て「地位人情ヲ諮リ総テ旧規則ニ拠」って「和漢ヲ斟酌シ内外ヲ折衷シ」て、とりあえず「僻邑ニ適スル」ような「法」を設けて「当分ノ規則」と致そうと思います。次のような内容です。

（中略）

掲載した「下等全課」を卒業したものはすぐ「上等ノ課」に進めます。もし、女子や「貧窮ノ男子」でやむを得ず4年以上修学することができない者は別に「簡易科」を設けてここに通せます。その「簡易科」においては、女子には「読物」、「習字」、「文章」、「紡績」等を習わせ、男子

には「読物」、「習字」等、「当人」の「才力分限ヲ計」って1科あるいは2, 3科を習わせます。また、掲載した「上下二等ノ全課」を「学齡普通」の「正則」とし、両課の卒業者でさらに修学を希望する者、あるいは教員の推薦がある者は「高等課」に進めます。この「上下二等ノ両課」を経て高等課に修学するのは「中学師範学専門諸学」の「階梯」である。「上下二等」を「正科」、「高等」を「諸専門学ノ予科」と称することにする。

資料2

小学教則之儀ニ付伺

昨十二年太政官第四拾号ヲ以学制ヲ被廢更ニ教育令ヲ御発行アリシヨリ天下ノ耳目茲ニ一洗シ各自其天然ノ権利ヲ磨シ固有ノ良知ヲ開發セント欲ス蓋シ古来人主ノ英断ヲ以テ旧弊ヲ改革スルヤ一得アレハ必一失アリ之ヲ統御スルノ要其文質緩緊如何ト見ルニアルノミ苟モ其任ニ当ルモノ之カ予防ノ法ヲ設ケテ豈注意尽力セサランヤ本県山鹿郡岩野芋生四丁三村ノ如キ固ヨリ辺郷僻邑タルハ又言ヲ俟スシテ明カナリ是時ニ当テ予メ簡易經当ノ法ヲ設ケ人心ノ嚮フ処ヲ定ムル事ナクンハ世ノ所謂寺子屋流トナリ或ハ儒学者流トナリテ偶文明開化ノ萌芽ヲ生スルモ一朝転シテ野蛮ノ風トナリ彼外国人ノ蔑如ヲ受ルモ亦知ル可ラス頃々聞ク各地ニ私学校ヲ興シ或ハ手習師匠ヲ唱エ或ハ翰林^子學^ヲ師トナルモノアリト窃ニ惟フニ或ハ本アリテ末ナキアリ或ハ彼ヲ知り此ヲ忘ルルアリテ天地間一種ノ贅物ニ属ストモ可^ト謂^ハカナランヤ

如斬ナルトキハ嘗テ朝廷ヨリ施行アル所ノ条理粲然タル学校ノ規則モ終ニ地ニ落テ水泡^{モナランカ}トナル^ニ実ニ長大息ノ至リナラスヤ因テ曩ニ^ニ予輩^ニ一^ニ有^ニ志者ト塾議ヲ遂ケ其地位人情ヲ諮リ総テ旧規則ニ抛リ和漢ヲ斟酌シ内外ヲ折衷シ以テ聊僻邑ニ適スルノ法ヲ設ケ当分ノ規則ト致度其次序如左(中略)

前ニ掲載スル下等全課ヲ卒業スルモノハ直チニ上等ノ課ヲ踏マシム若シ女子或ハ貧窮ノ男^子兒^等不得止ノ事故アリテ四年以上ノ就学スル事能ハサル者ハ教員ノ見込^{別ニ簡易科ヲ設ケテ之ヲ}ヲ以テ^テ変則^ヲヲ踏マシム其^{簡易科}変則タルヤ女子ハ読物習字文章^紡編績等ヲ習ハシメ男子ハ読物習字算術等当人ノ才力分限ヲ計リ一科或ハ二三科ヲ学ハシム

前ニ掲載スル上下二等ノ全課ヲ卒業スル者ヲ学齡普通ノ正^則規^トス最此兩課ヲ卒ルモノ^{ト雖モ}学齡^{ルカ又ハ業}満期迄ハ当人ノ翼望ニ因リ修学行スル事ヲ許シ直チニ高等ノ課ヲ踏マシム^{教員ノ見込ヲ}30) 因^ル以テ

前ニ掲載スル上下二等ノ両課ヲ經テ^{修学スル}拔^{之レ}群衆ニ異ナル者ハ高等ノ課ヲ踏マシム即チ中学師範学専門諸学ノ階梯トス是^{タリ如是課程ヲ修スルモノハ}レ則チ上下^科兩等ヲ以テ小学ノ正^{テ別ニノ二課諸専門課学等ノ予科トス}則^ヲトシ高等ヲ以テ^{ヲ以テヲ設タルモノナリ}之カ^ヲ変則トスルモノナリ

右之通施行到度此段奉伺候也

山鹿郡岩野小学校

年 月 日 教員 何ノ誰 印

同郡芋生小学校

教員 何ノ誰 印

同郡四丁小学校

教員 何ノ誰 印

右三小学校

学務委員 江上玄良 印

右戸長

太田黒三蔵 印

注：1) 文中の斜字体で表記した部分は原文では推敲の結果、削除された部分であることを意味している。

- 2) 斜字体の部分の上(又は下)の文字は、原文では新たに書き加えられた部分であることを意味している。

以上のような伺を県に出したわけであるが、実際にこれに基づいて新しい教則により教育がなされたかどうかは、資料の都合で確認できないが、本県においても地域において独自に教則を編成しようとした事実があったことは確かである。

(ii) 「岩野・四丁・芋生」における「小学校教則」

前述の伺の中に掲載されていた教則が下記の資料3の「山鹿郡岩野・芋生・四丁小学校教則」である。これを1880年2月の公立小学校規則模範と比べてみよう。まず、修業年数であるが、県のものが下等課3年・上等課3年・高等課2年であるのに対して、この教則では下等課3年・上等課3年・高等課3年になっている。内容は別にして、ここに高等課を「中学師範学専門諸学ノ階梯タ」らしめようとした教則作成者の意図が伺える。

教科目については表2をみると、明らかに鹿北の教則の方が科目数が少ないことがわかる。県の教則よりも、より「簡易」にしたのであろう。

教科の内容については、まず県に比べて三か村の教則は内容の目標が全体に簡単で、少ない。具体的な中身について、ここでは「算術」においてのみ比べてみよう。表3は県教則と比較したものである。「算術」も、県教則の方が指示が細かい。また、共通しているのは下等小学では珠算だけで教えるようにしている点であろう。筆算については、県が上等小学の第6級から指導を始めるのに対して、三か村は第1級からようやく始めている。筆算の内容も高等科卒業までに県が解析、幾何といったものまで教えるのに対して、分数までで終わっている。よって、三か村の方が科学としての数学の体系である筆算よりも実用的で生活に根ざした珠算を重視して作成したことがわかる。

県教育会議や郡区教育会議で民衆の生活にふさわしい教育内容の編成への模索がみられたように、ここ県北でも村単位で教則を編成し、民衆自らが自らの状況に応じた、自らに必要な教育を生み出すための貴重な模索がみられる。

資料3 山鹿郡岩野・芋生・四丁小学校教則

岩野
山鹿郡 芋生 小学校教則
四丁

下等小学課程	上等小学課程	高等小学課程
<p>第六級</p> <p>一 読物 依旧</p> <p>一 復読</p> <p>一 書取</p> <p>一 口授</p> <p>一 復習</p> <p>一 算術 依旧但以下ヲ除ク</p> <p>一 習字</p> <p>一 体操</p> <p>第五級</p> <p>一 読物 勸孝邇言上</p> <p>一 復読</p> <p>一 書取</p> <p>一 口授</p> <p>一 復習</p> <p>一 算術 乗算九九声</p> <p>一 習字</p> <p>一 体操</p> <p>第四級</p> <p>一 読物 勸孝邇言下</p> <p>一 復読</p> <p>一 書取</p> <p>一 口授</p> <p>一 復習</p> <p>一 算術 八算ノ二三</p> <p>一 習字</p> <p>一 体操</p> <p>第三級</p> <p>一 読物 書牘文上</p> <p>一 復読</p> <p>一 摘書</p> <p>一 書取 書牘文上</p> <p>一 口授</p> <p>一 復習</p> <p>一 算術 八算ノ二三</p> <p>一 習字</p> <p>一 体操</p> <p>第二級</p> <p>一 読物 書牘文外 地理初歩</p> <p>一 復読</p> <p>一 摘書</p> <p>一 問答 地理初歩 地球儀</p> <p>一 書取 書牘文下</p> <p>一 口授</p> <p>一 復習</p> <p>一 算術 八算ノ六七</p> <p>一 習字</p>	<p>第六級</p> <p>一 読物 文部省読本四 日本地誌略一</p> <p>一 復読 暗記</p> <p>一 作文 容易ナル書簡文</p> <p>一 口授</p> <p>一 復習</p> <p>一 算術 見一ノ二位</p> <p>一 習字 草書 書簡文</p> <p>第五級</p> <p>一 読物 文部省読本五 日本地誌略二三</p> <p>一 復読 暗記</p> <p>一 問答 日本地誌略二三</p> <p>一 作文 通常書簡文</p> <p>一 口授 復習</p> <p>一 算術 見一ノ三</p> <p>第四級</p> <p>一 読物 日本地誌略四 日本略史上</p> <p>一 復読 暗記</p> <p>一 作文 通常書簡文及公用文</p> <p>一 口授</p> <p>一 復習</p> <p>一 算術 見一ノ四</p> <p>一 習字 草書書簡文</p> <p>第三級</p> <p>一 読物 日本略史下 万国地誌略一</p> <p>一 復読 暗記</p> <p>一 作文</p> <p>一 口授</p> <p>一 復習</p> <p>一 算術 異乗同除</p> <p>一 習字 草書書簡文</p> <p>第二級</p> <p>一 読物 万国地誌略二 万国史略上</p> <p>一 復読 暗記</p> <p>一 作文</p> <p>一 口授</p> <p>一 復習</p> <p>一 算術 利息算</p> <p>一 習字 草書書簡文</p>	<p>第六級</p> <p>一 読物 小学外篇ノ一 日本外史一冊</p> <p>一 復読</p> <p>一 講義 小学</p> <p>一 問答 外史</p> <p>一 作文 記事</p> <p>一 口授</p> <p>一 筆算 乗除法</p> <p>一 習字 楷書千字文</p> <p>第五級</p> <p>一 読物 小学外篇ノ二 日本外史二冊</p> <p>一 復読</p> <p>一 講義 小学</p> <p>一 問答 外史</p> <p>一 作文 記事</p> <p>一 口授</p> <p>一 筆算 四則雑題</p> <p>一 習字 草書千字文</p> <p>第四級</p> <p>一 読物 修身論第一二 日本外史三冊</p> <p>一 復読</p> <p>一 講義</p> <p>一 問答</p> <p>一 作文 記事</p> <p>一 口授</p> <p>一 筆算 小数四則</p> <p>一 習字 草書適宜</p> <p>第三級</p> <p>一 読物 修身論第三 物理第一 日本外史三冊</p> <p>一 復読 暗記</p> <p>一 講義 修身論 物理階梯</p> <p>一 問答 外史</p> <p>一 作文 記事</p> <p>一 口授</p> <p>一 筆算 諸等</p> <p>一 習字 草書適宜</p> <p>第二級</p> <p>一 読物 物理階梯第二三 日本外史三冊</p> <p>一 復読</p> <p>一 講義 物理階梯</p> <p>一 問答 外史</p> <p>一 作文 記事</p> <p>一 口授</p> <p>一 筆算 分数以上</p> <p>一 習字 草書適宜</p>

第一級		第一級		第一級	
一 読物	県地誌略上下	一 読物	万国地誌略三 万国史略下	一 読物	十八史略 唐宗八大家
一 復読		一 復読	暗記	一 復読	十八史略
一 摘書	同	一 作文	記事	一 講義	同
一 問答	同	一 口授		一 問答	同
一 書取	受取証文及 容易キ公用文	一 復習		一 作文	論
一 口授		一 算術	洋算加法及び減法	一 口授	
一 復習		一 習字	草書書簡文	一 筆算	分数以上
一 算術	八算ノ八九			一 習字	楷書細字
一 習字					

注：表中の斜字体の部分は，原文で削除があったことを示す

表2 県教則と「山鹿郡 岩野・芋生・四丁」教則との教科目比較

	下等小学		上等小学		高等小学	
	鹿北 ³¹⁾	県	鹿北	県	鹿北	県
	読物 復読	読物 復読	読物 復読	読物 復読	読物 復読	読物 復読
教科目		摘書		輪読 輪講		輪読 輪講
	書取	問答 書取	作文	暗記 作文	問答	暗記 作文
	口授 復習	口授 復習	口授 復習	文談 口授 復習 珠算	口授	文談 口授 復習 珠算
	算術 習字	算術 習字	算術 習字	習字 字画	筆算 習字	算術 習字 字画
	体操	体操		体操		習字 字画 簿操

表3 県教則と「山鹿郡 岩野・芋生・四丁」教則との「算術」比較

級	下 等 小 学		上 等 小 学		高 等 小 学	
	鹿北	県	鹿北	県	鹿北	県
6	依旧但以下を除く	日本数字図を用い1よりの読法と書き方。加法九々図暗誦	見一ノ二	加法減法加法減法見一四以上	乗法除法	
5	乗算九九声	十露盤を用い容易加法、減法九々図暗誦	見一ノ三	乗法除法乗除法容易な異乗同除	四則雑題	
4	八算ノ二三	加法減法	見一ノ四	四則雑題異乗同除	小数四則	単比例より按文通析比例まで
3	八算ノ二三	加減法、乗算九々図暗誦	異乗同除	小数四則諸等諸法利息算	諸等	連鎖和較比例・平均損益
2	八算ノ六七	乗法、除算九々図暗誦	利息算	分数	分数以上	開平開立対数法・求積法
1	八算ノ八九	八算・見一三位まで	洋算加法及び減法	単比例	分数以上	数学級数度学級数・幾何学

注：1) 鹿北の教則での算術の扱いは

- ・下等小学および上等小学では「算術」、
- ・高等小学では「筆算」となっている。

2) 県の教則での算術の扱いは

- ・下等小学では「算術」（ただし、一切珠算を用いるとある）、
- ・上等小学では「筆算」（表上段）と「珠算」（表下段、ただし、2・1級にはない）に分かれている。
- ・高等小学では「算術」となっている

3) 高等小学は県教則が4級から1級までであるのに対して、鹿北の教則が6級から1級までであるので、便宜上、級の数字の部分があうようにした

4) 鹿北の教則は、前掲「小学教則之儀ニ付伺」、県の教則は1880年2月制定の「公立小学規則模範」によった。

なお、本稿は、堀・藤川の共通の課題意識にもとづいて行った研究であり、何度かの討論を経てまとめたものであるが、執筆分担は次の通りである。

はじめにおよびⅠ…堀、Ⅱ、Ⅲ…藤川

注

- 1) 第一分冊, 督学局年報, PP. 38~137.
- 2) 第一分冊, 学区巡視功程, PP. 11~62.
- 3) 片桐芳雄, 『自由民権期教育史研究』, PP. 155~156 (1990), 東京大学出版会.
- 4) 前掲同書, P. 156.
- 5) 花立三郎, 『大江義塾—民権私塾の教育と思想』, 1982, ペリかん社他.
- 6) 片桐芳雄前掲書, 第4章第1節.
- 7) 藤川裕典, 「教育令期における民衆の教育要求に関する一考察—熊本県の事例を中心に—」, P. 98 (1994), 熊本大学大学院教育学研究科修士論文.
- 8) 堀浩太郎, 「熊本県近代公教育制度成立史(I)」, 熊本大学教育学部紀要第35号, P. 252 (1986).
- 9) 熊本県教育会, 『熊本県教育史』上巻, PP. 417~421 (1931).
- 10) 前掲同書, PP. 570~572.
- 11) 前掲同書, PP. 574~575.
- 12) 前掲同書, P. 567 によった.
- 13) 前掲『熊本県教育史』, PP. 570~572 の「教育会規則」によった. この教育会議の規則は 1876 年 (明治9) 年7月18日の「教育会略規」を大幅に改正したものである.
- 14) 熊本師範学校は 1874 (明治7) 年5月「仮師範学校」として熊本区新町会輔堂跡に開校. 西南戦争で焼失したため, 78 年5月, 同敷の内町に新築再興, 「熊本師範学校」と称し, 同年9月には付属小学校も開設した. なお, 学校長は 1878 年5月から 80 年1月までが田口政五郎, 80 年1月から同6月まで古賀保高, 80 年6月から同8月までが山田武甫となっている (熊本大学教育学部同窓会, 『熊本師範学校史』, 1952 年によった.)
- 15) 前掲『熊本県教育史』, PP. 572~573 によった.
- 16) 「熊本新聞」, 1878 (明治11) 年6月24日付, 第327号, 投書欄.
- 17) 大槻健『学校と民衆の歴史』, P. 124 (1980), 新日本出版社.
- 18) 前掲『自由民権期教育史研究』, P. 322.
- 19) 「熊本新聞」, 1880 (明治13) 年2月22日付, 第617号, 社説欄.
- 20) 前掲『自由民権期教育史研究』, P. 322.
- 21) 「熊本新聞」, 1880 (明治13) 年8月14日付, 第749号, 社説欄. なお, 「地方実情第六稿 小学校」と題して述べられている.
- 22) 前掲『自由民権期教育史研究』, P. 313.
- 23) 「熊本新聞」, 1878 (明治11) 年8月22日付, 第356号, 社説欄.
- 24) この社説欄を書いた人物は, 県の臨時教育会議を傍聴したとみえて, 議事のやりとりを交えて, 結局, 男女別の教則制定にならなかったことを不満としていた.
- 25) 「熊本新聞」, 1880 (明治13) 年9月13日, 第774号, 投書欄. なお, 投書には「教則編成ヲ論ス 遠山貢」とある.
- 26) 鹿北町は県北の福岡県境に位置する山間の町. 早くから (16 世紀頃) から和紙づくりが行われており, 明治初期には県内の養蚕の先進な存在でもあった.
- 27) 鹿本郡鹿北町足立サジエ氏蔵, 「足立家文書」. 中略部分は資料の教則の部分である. なお, この「小学教則ノ儀ニ付伺」は『鹿北町町誌』1974 年, にも掲載されているが, 本文のみの掲載である.
- 28) 「熊本新聞」, 1880 (明治13) 年3月6日付, 第623号, 県庁録事欄にある, 同年2月24日付, 甲第24号によった.
- 29) 正確には 1879 年2月から「郡区町村編成法」の施行により, 第6大区14小区は山鹿郡岩野^{イノ}四丁, 芋生の3ヶ村にかわっている. 実際, 江上玄良は 1879 年2月25日付で県から「山鹿郡岩野四町芋生三ヶ村戸長申付候事」という文書をもっている (前掲「足立家文書」による).
- 30) 原文は「ニ」と「ヲ」が重なっているため, 筆者が改めて「ヲ」を付けた.
- 31) 山鹿郡岩野・芋生・四丁の三ヶ村を便宜上, 筆者が「鹿北」として記載した.